

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「パレスチナ／イスラエル紛争の変容：最終的地位と新たな課題」（令和4年度第3回研究会）

日時：令和5年1月20日（金曜日）

午後2時～午後7時

場所：本郷サテライト／Zoom によるオンライン同時開催

報告者名・報告タイトル：

錦田愛子（AA研共同研究員，慶應義塾大学）

「オスロ合意による体制構築の課題:主権と治安管理をめぐるトレードオフ」

山本健介（AA研共同研究員，静岡県立大学）

「オスロ合意と「イスラエルのイスラーム運動」：国家との関係と民族意識」

鶴見太郎（AA研共同研究員，東京大学）

「シオニスト／イスラエルの対アラブ観の変遷」

錦田報告では、オスロ合意によってもたらされた枠組みがパレスチナ問題に置いてどのような影響を及ぼしたのかについて発表された。はじめに、イスラエルパレスチナ紛争におけるオスロ合意の意義と残された課題について明示したうえで、オスロ合意が生み出した新たな問題には、パレスチナの主権の制限が厳しくなったことにくわえて、自治政府の役割がイスラエルの下部組織へと変化してしまったことを挙げた。

山本報告では、オスロ合意で残された課題とイスラーム運動の位置づけが取り上げられた。はじめに、オスロ合意に対する48年パレスチナ人の期待観と要求について示したうえで、ナクサ以降の宗教復興からイスラーム運動が形成され、その目標について明示した。クネセト選挙以降にイスラーム運動は「南部潮流」と「北部潮流」に分岐していく過程を踏まえて、パレスチナ人の民族意識が、イスラエルの政治的、社会的制度とは離れてしまっていると示した。

鶴見報告では、シオニストがどのようにアラブを捉え、対峙していたのかについて、個人に焦点をあてて分析がなされた。初めに、アラブ観の主な要素には、「危険」「憧れ」「変化」といった三つの要素を説明し、対アラブ観についての話では、アラブ人とどのように対峙するかについては、イスラエル内外のアラブ人を分けて対応する立場、アラブ人を域外に移送しようとする立場、アラブ人と二民族国家をつくろうとする立場をそれぞれ出しながら、シオニストの政治、宗教、人口構成という事情を踏まえて説明した。

いずれの報告もオスロ合意による法制度や認識の変化を扱い、活発な質疑応答が行われ

た。

中本美羽（日本女子大学・文学部史学科）

（以上）